

VI 調査のまとめ

関東遺跡における方形周溝墓の様相

今回の関東遺跡の調査において弥生時代後期末から古墳時代前期初頭段階に造営された9基の方形周溝墓が検出され、一つのまとまりを示す小墓域の全容を明らかにすることができた。大型の第1号周溝墓を中心に周溝を連結あるいは接続しながら列状に中小の方形周溝墓が群集したあり方を示すもので、このうち2基の方形周溝墓に方台部を拡張した事例が確認され、方形周溝墓における祭祀行為等の性格を考える上で大きな成果が挙げられた。

ここでは関東遺跡で検出された方形周溝墓の概要を中心としながら、方形周溝墓の拡張の問題や出土土器の編年の位置づけなどについて概述し、まとめにかえることとする。

(1) 方形周溝墓について

形態 方形周溝墓の平面形態を周溝の状態から分類すると、以下のような種類に分類される。なお、括弧つきのものは遺存状況が良好でなく、推定復元によるものであることを予め断っておきたい。

1類 周溝が全周するもの…SR(4)・6・(7)

2類 一隅が途切れるもの

a種 南東隅に陸橋部をもつもの…SR1・2

b種 北西隅に陸橋部をもつもの…SR8

3類 二隅が途切れるもの…SR3

4類 「コ」の字形に周溝を巡らすもの…SR5・9

周溝形態、特に陸橋部の有無とその位置関係に着目して分類した結果、大きく4類に分類された。また、このうちの2類は陸橋部の位置の違いにより2種に細分することができる。

1類は周溝の全周するもので第6号周溝墓のみが確実な例である。第4・7号周溝墓の2基は後世の攪乱により遺存状況があまり良好でないが、1類の可能性が考えられる。

2類は一隅が途切れるもので、大型の第1・2号周

溝墓が南東隅に陸橋部をもつ2a類、第8号周溝墓が北西隅に陸橋部をもつ2b類に区分される。2a類は群中では有力な一群にのみ占有された平面形態として中心的な存在である。

3類とした第3号周溝墓は南東隅と北西隅の二隅で周溝が途切れ、2箇所陸橋部をもつもので、この他に群内で類例は確認されていない。

4類は、第5・9号周溝墓に認められた「コ」の字形に周溝を巡らす特異な周溝形態である。後述するように両者とも2次にわたって周溝を掘削した可能性が強く、方台部の拡張例として注目される。

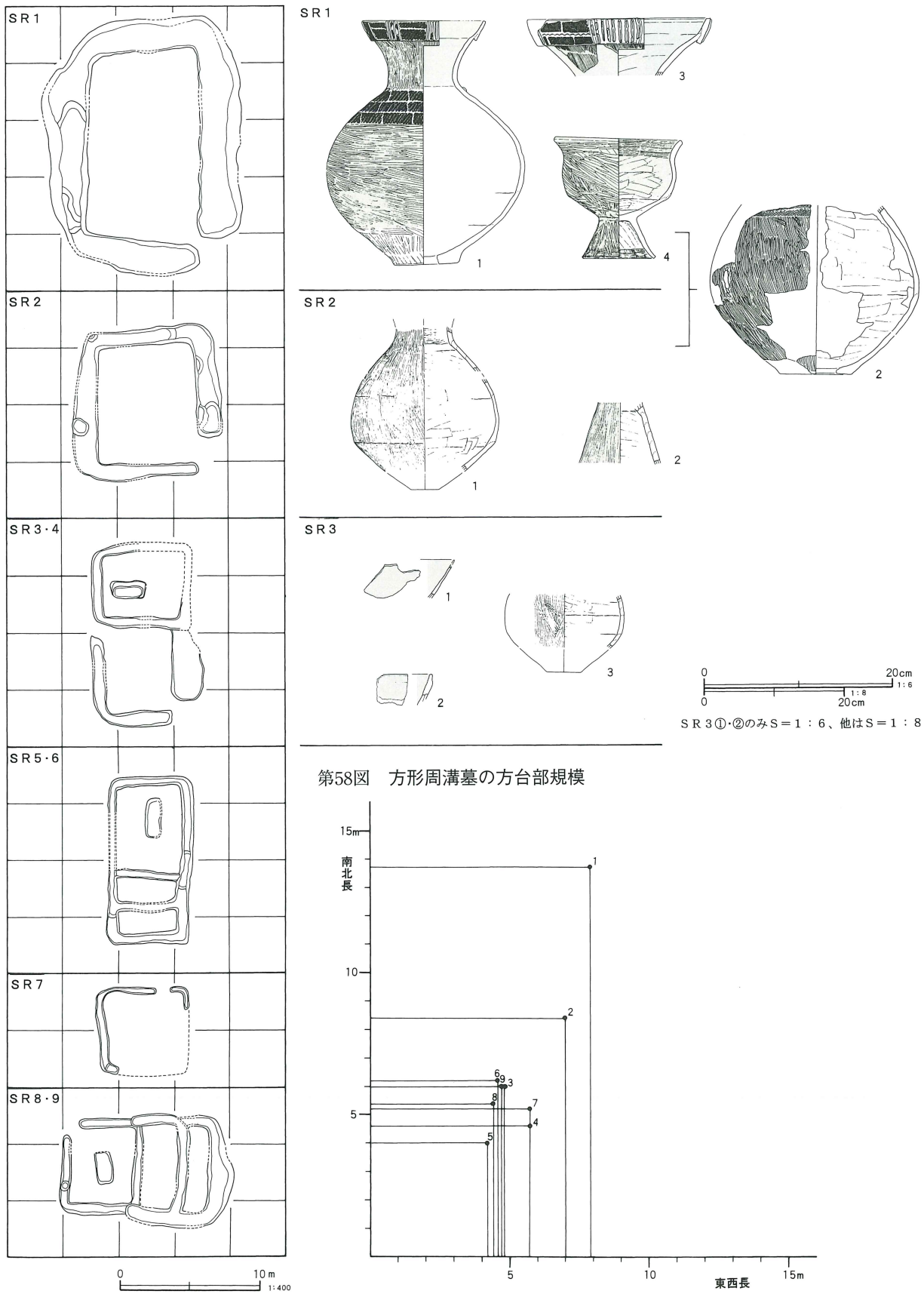
規模 方台部の規模及び面積等の分布傾向から大型・中型・小型の3つに大きく区分することができる。

I群 一辺の長さが13mを超す大型のもので、第1号周溝墓が該当する。方台部規模は長軸長13.7m、短軸長7.9mを測り、長軸と短軸の比率は0.6の長方形平面である。方台部の面積は101.9㎡である。

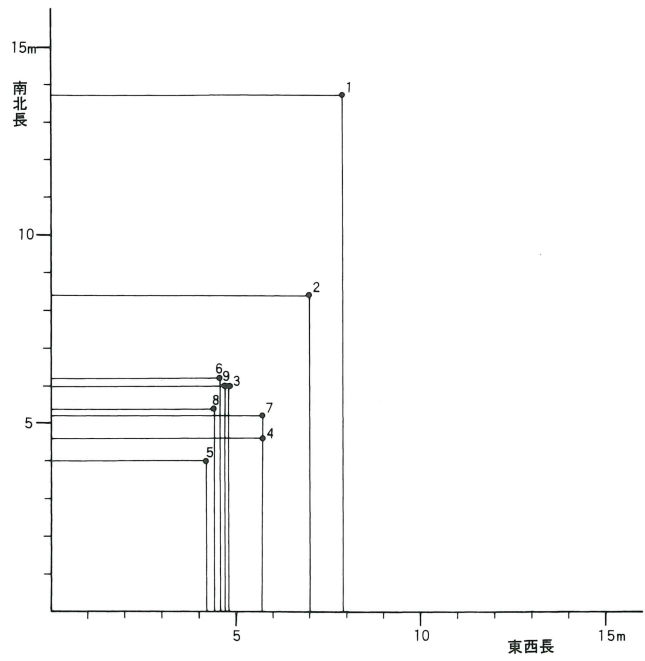
II群 一辺の長さが8mを越す中型のもので、第2号周溝墓が該当する。方台部規模は長軸8.4m、短軸7.0mを測り、長軸と短軸の比率が0.83で、方台部の平面形態は第1号周溝墓に比べると正方形に近い。また、方台部の面積は58.2㎡で、第1号周溝墓の1/2の面積よりも少し上回っている。

III群 一辺10m以下の小規模なもので、群中では主体を占めている。長軸長4.2~6.2m、短軸長4.0~5.2mの範囲に分布し、長軸を東西方向に採る第4・5・7号周溝墓と、南北方向に採る第3・6・8・9号周溝墓に分かれる。このうち第5・7号周溝墓は正方形に近い方台部平面形を示すが、他はいずれも長方形を指向している。また、方台部の面積は15.4~28.4㎡の範囲に収まり、第1号周溝墓と最少の第5号周溝墓を対比すると方台部の面積比は6.6倍で、さらに周溝部分を含めた総面積を比較すれば、その差は大きく広がり、周溝墓の占有面積における規模格差は歴然としてい

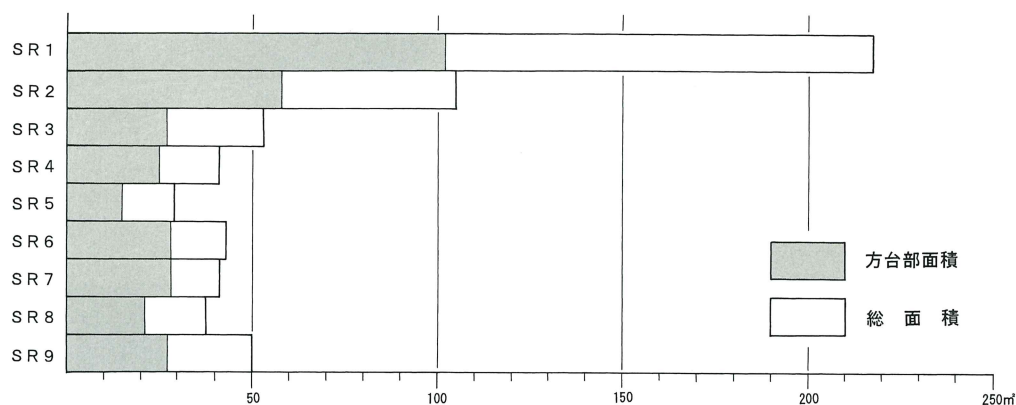
第57図 方形周溝墓と出土土器



第58図 方形周溝墓の方台部規模



第59図 方形周溝墓の面積比較



る。同様に、Ⅱ群とⅢ群との間の規模格差も大きく、先述した方台部平面形の相違も考え合わせると、第1・2号周溝墓を有力墓系列として中心的な一群として位置づけることができる。

主軸方位 方台部の長軸方向を主軸方位として検討すると、第1・2・3・6・8・9号周溝墓の6基は概ね長軸方向を南北に採用している。一方、第4・5・7号周溝墓の3基は東西方向に長軸を採っている。

次に、方台部の南北軸偏差をみると北から西へ19～37度の範囲に分布し、35度前後に第1・2・7号周溝墓、25度前後に第3～6号周溝墓、20度前後に第8・9号周溝墓がかたまって分布している。主軸方位の同一性が、後述する群構成や造墓過程にも大きく反映されている可能性が考えられる。

「拡張」周溝墓 今回の調査で第5・9号周溝墓の2基に「コ」の字形の周溝を接続した特異な周溝形態が確認された。その周溝形態は「拡張住居」と同じように方台部を2度にわたって拡張した状態を示すもの

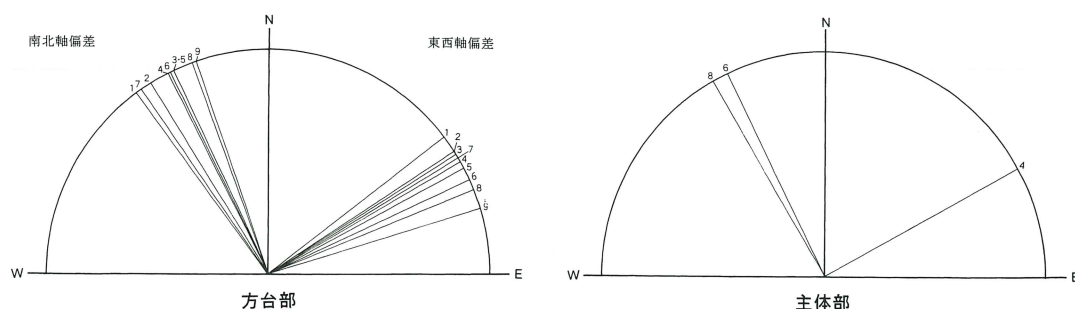
である。しかし、事実報告の中でも触れたように後世の攪乱により遺構の残りは良好でなく、確実に拡張されたものであると判断し得る確証は得られなかった。

関東地方における「拡張」周溝墓について検討した伊藤敏行氏の研究成果によれば弥生時代終末から古墳時代初頭段階に方形周溝墓の多様性が顕在化する現象が認められることを指摘（伊藤1994）しており、本遺跡例に関しても造墓活動における一つの規制と位置づけておきたい。

現状では「拡張」周溝墓出現の要因として、第1号周溝墓にみられる方台部の長方形指向が、小型方形周溝墓の直列的な連結状況や、方台部の連続的な拡張等と密接な関連を有しているものと想定される。今後、拡張の契機が追葬に伴う埋葬空間の拡大であったのか、あるいは特別な祭祀空間として付加されたものであったのか、調査事例を基にした上でその性格について検討していくことが必要である。

主体部 方台部内から主体部と想定される土壌が第

第60図 方形周溝墓の主軸方位



第8表 方形周溝墓計測表（単位＝m、面積＝㎡）

周溝墓	形態	方台部上面	方台部下面	周溝外周	周溝幅	周溝深度	方台部面積	総面積	南北軸偏差	東西軸偏差
1	一隅切	13.7×7.9	14.2×8.6	17.8×14.3	1.5～3.4	0.2～0.8	101.9	217.5	N-37° -W	E-38° -N
2	一隅切	8.4×7.0	8.8×7.3	10.5×10.4	0.85～1.8	0.2～0.5	58.2	105.1	N-32° -W	E-38° -N
3	二隅切	6.0×4.8	6.3×4.9	7.9×7.7	0.6～2.3	0.1～0.25	27.3	53.2	N-25° -W	E-32° -N
4	全周？	5.7×4.6	5.8×4.9	7.0×5.9	0.7～0.8	0.15～0.25	25.2	41.3	N-27° -W	E-30° -N
5	コの字	4.2×4.0	4.5×4.3	5.9×5.2	0.6～0.9	0.2～0.4	15.4	29.1	N-25° -W	E-28° -N
6	全周	6.2×4.6	6.5×4.9	7.3×6.0	0.6～0.9	0.1～0.25	27.6	42.7	N-26° -W	E-25° -N
7	全周？	5.7×5.2	5.9×5.4	6.7×6.1	0.4～0.6	0.1～0.15	28.4	41.4	N-35° -W	E-31° -N
8	一隅切	5.4×4.4	5.7×4.7	6.8×5.7	0.6～0.9	0.1～0.3	20.9	36.7	N-20° -W	E-22° -N
9	コの字	6.0×4.7	6.3×5.0	7.8×7.2	0.7～1.9	0.3～0.4	27.4	50.4	N-19° -W	E-17° -N

4・6・8号周溝墓の3基で検出された。いずれも方台部のほぼ中央に位置する長軸2m前後の長方形の土壌である。調査時、これらの覆土はすべて篩にかけて遺物の検出に努めたが、副葬品と思われるような遺物はまったく発見されなかった。そのため埋葬施設としての確証に欠ける点は否めないが、方台部における位置関係、形態、規模等から主体部の蓋然性が高いものと判断した。

主体部の主軸方位は第4号周溝墓例がN-61°-Eと東に大きく振れているのに対して、第6・8号周溝墓例はN-30°-W前後を指し、北北西方向にまとまる傾向が窺われた。荒川水系に分布する方形周溝墓のうち主体部が検出されたものの多くは、主軸方位を北北西に採るものが優勢であると指摘されており（伊藤1988）、同一の傾向性として留意される。

次に、主体部の構築方法等に関しては掘り込みが浅く具体的な内容を知ることのできるような調査例はなかったが、第4号周溝墓例には土壌底面を2段に掘り込み、外側部分を中心にローム土で埋め戻した状況が確認された。上福岡市権現山第7号周溝墓の主体部では棺底周辺にロームブロックが敷き詰められており、構築方法に関連性が認められる（笹森1984）。

溝中土壌 溝中土壌は第2・6・8号周溝墓の3基で確認された。最大規模の第1号周溝墓には溝中土壌は認められず、中小規模のものに限定されており対照的なあり方を示している。

このうち第2号周溝墓の西溝で確認された溝中土壌

は径1.3×1.2m、深さ0.3mの楕円形のもので、破砕された壺の破片が上部からまとまって発見された。土層堆積状況の観察によれば、周溝埋土を切り込んでいることは明らかであるが、明確な埋め戻し土等は認められず、覆土中に焼土粒子及びローム粒子が混入されていたのであった。土壌の科学分析を実施していないため埋葬施設であるかどうかは言及できないが、埋め戻し時、もしくは埋没過程に破砕した土器を振りまくような儀礼行為を実修した「祭祀施設としての土壌」（福田1991）の可能性も考えられる。

この他に第6号周溝墓と第8号周溝墓からも溝中土壌が検出されている。第6号周溝墓では、第5号周溝墓と接続する東溝部分に狭長な長方形の土壌が1基検出された。位置関係から第5号周溝墓の造営に伴い、あるいは造営後に掘削されたものと想定されるが、短軸規模がやや矮狭であることから埋葬施設と断定することは難しい。また、第8号周溝墓の西溝南西コーナー寄りに円形の土壌が1基検出された。遺物が出土していないため、その性格については明確でない。

連結溝 第1号周溝墓の南溝と第2号周溝墓の北溝の間に掘削された第2号溝は、調査の所見では周溝相互を連結し、かつ方台部との重複がみられなかったことから、方形周溝墓の造墓に伴って掘削された「連結溝」の可能性を指摘した。

方形周溝墓群内に存在する溝状遺構について検討した福田聖氏は、連結溝の性格について「単位墓群内、単位墓群間を連結することによって表示される家族の

関係」を表徴した特殊な遺構であると指摘している(福田1995)。第2号溝は規模的にはさほど大きなものではないが、第1・2号周溝墓間における土器の接合関係から両者には緊密な関係が想定されており、その可能性は高いものと考えられる。

その他の付属施設 溝中土壌以外の周溝内施設として、周溝底面の段差やテラス、ピット等が認められた。

周溝底面に作り出された段差は、第1・2・5号周溝墓等で検出されている。第1号周溝墓の西溝は周溝外側に大きく張り出し、南西コーナー寄りの底面に階段状の段差が造り出され、方台部の高さを視覚的に強調する効果をあげている。また、群中では最も多くの土器が西溝部分から出土しており、その出土状況から推しても特別な場として意識されていたことが容易に想像される。

第2号周溝墓では西溝の溝中土壌以外にも周溝部分にテラス、段差、ピット等の諸施設が造作されていた。テラス状の段差は、東溝方台部側の陸橋部寄りと北東コーナー寄りの2箇所が付設されており、その周辺からは第1号方形周溝墓と接合関係にある壺の胴部破片と高坏脚部が出土し、陸橋部を中心とした儀礼空間に関連した施設の一部を構成していたものと考えられる。また、北溝中央部の底面に段差が設けられ、底面に高低差を作り出していたほか、北西コーナーの外周に接して小ピット状の掘り込みが検出されており、コーナーが周溝墓の重要な位置として認知されていたことを示している。

周溝内部に検出された様々な施設の具体的な性格については明確にし得ないが、伊藤氏が指摘するように「方形周溝墓の周溝は単なる“区画溝”ではなく、さまざまな周溝中諸施設やそれに関連した周溝中祭祀行為の場」として位置づけられよう(伊藤1996)。

(2) 出土土器について

供献土器は、第1・2・3号周溝墓の3基から壺や高坏などが数点ずつ出土ただけで、残りの6基からはほとんど検出されなかった。全体的に供献土器の減

少傾向が認められ、しかも土器の供献は大型の方形周溝墓に限定されたあり方を示している。

ここでは、第1・2・3号周溝墓出土土器を中心に編年的位置づけについて簡単に触れることにしたい。

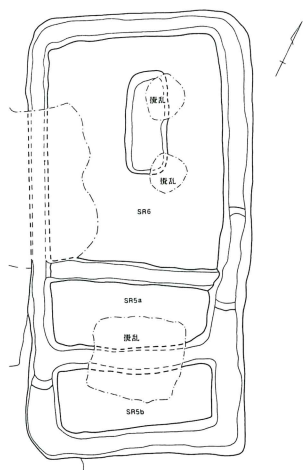
第1号周溝墓出土土器 第1号周溝墓からは複合口縁壺2、壺胴部1、折り返し口縁壺破片1、台付鉢1等が出土している。

第37図1の複合口縁壺は頸部が直立し緩やかに外反して口縁部に移行する形態で、頸部が「く」の字状に屈折するものよりも古相を留めているが、胴部は球形に近く新しい様相が認められる。また、複合口縁の装飾は棒状浮文のかわりに縦位の沈線を描き、2段に斜行縄文を施文しただけで、全体に簡略化が進み、下端の刻目などは欠落している。胴部の縄文帯はS字状結節文や沈線による区画文はなく、地文に口縁部と同じ原体を用いて3段に斜行縄文が施文され、頸部に円形浮文を貼付している。このように器形の特徴に古相を留めているものの、口縁部の装飾の簡略化や胴部文様帯区画の省略などに新しい特徴を示していることが看取される。

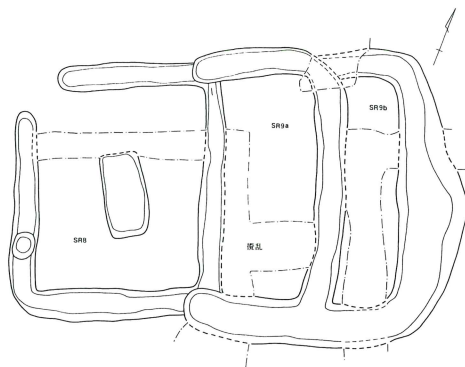
第37図2は胴部に網目状撚糸文を施文した大型壺で口縁部を欠損しているため編年的位置づけの検討材料に欠けるが、胴部が球形となり新しい様相がみられる。また、この土器には打ち欠きによる底部穿孔が観察されたほか胴部に不整形を呈する小孔が認められた。この小孔が意図的な穿孔であるのか、あるいは鼠の歯痕に起因するものなのか検討を要する(図版29)。

第37図3の複合口縁壺の口縁部破片は、第38図5の胴部破片と同一個体の可能性の高いものであることからまとめて扱うこととする。幅広の複合口縁に9本一組の棒状浮文を貼付し、S字状結節文を中央に巡らした羽状縄文を施文する。胴部縄文帯は沈線で区画され、その中に羽状縄文を2段に充填し、上段にS字状結節文を1条巡らす。下段には金属製の工具を用いたと推測される細線で連続山形文が描かれ、文様内部の縄文は磨消していない。この土器が最も弥生土器的な色彩を残すものであるが、口縁部に貼付された棒状浮文の

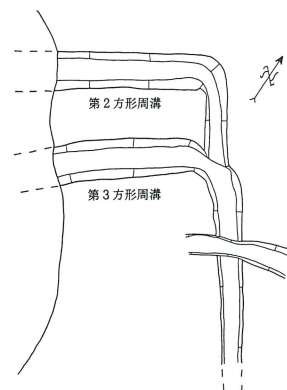
第61図 方形周溝墓の拡張例（1）



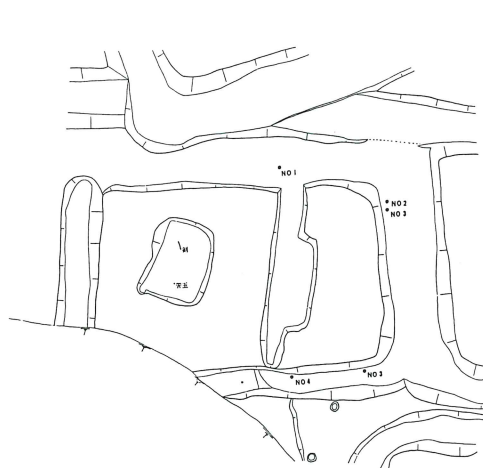
1 関東遺跡第5・6号方形周溝墓



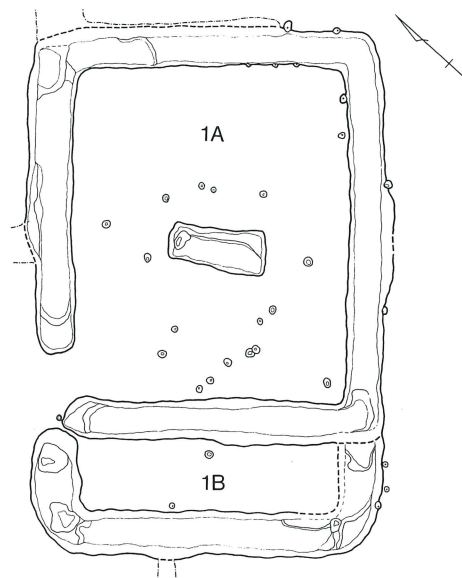
2 関東遺跡第8・9号方形周溝墓



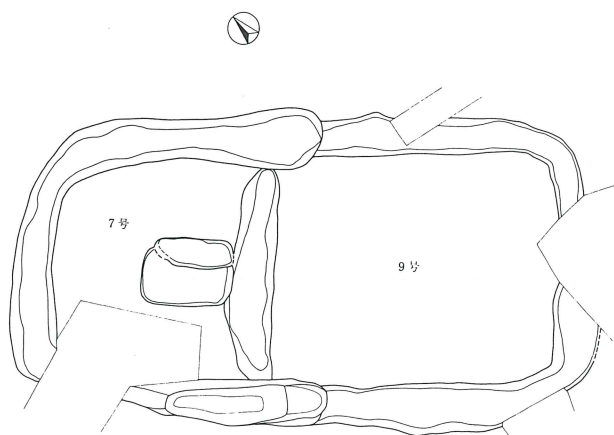
3 針ヶ谷北通遺跡第2・3号方形周溝墓



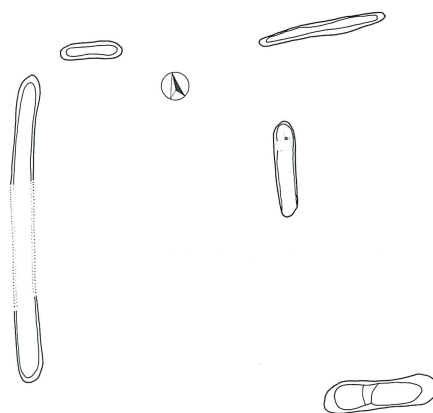
4 薬師耕地前遺跡第7号方形周溝墓



5 新井三丁目遺跡第1号A・B方形周溝墓



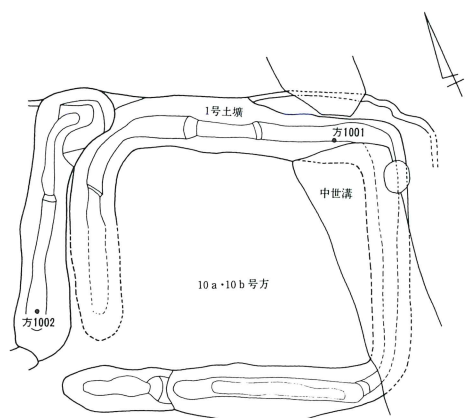
6 王子ノ台遺跡第7・9号方形周溝墓



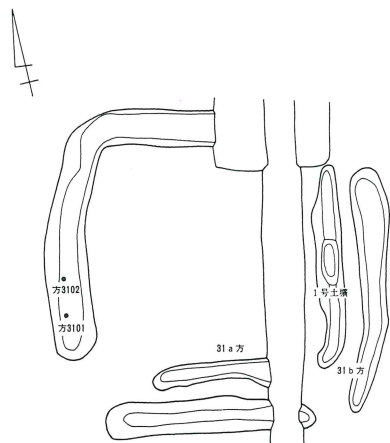
7 富士見町遺跡第10号方形周溝墓

0 5m
1:200

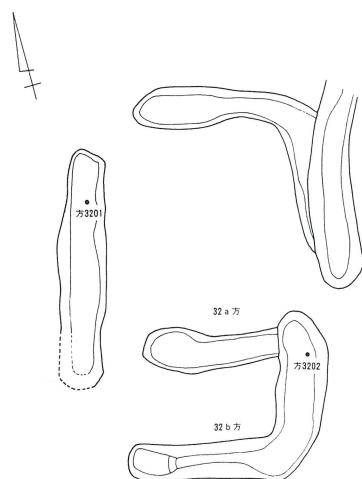
第62図 方形周溝墓の拡張例（2）



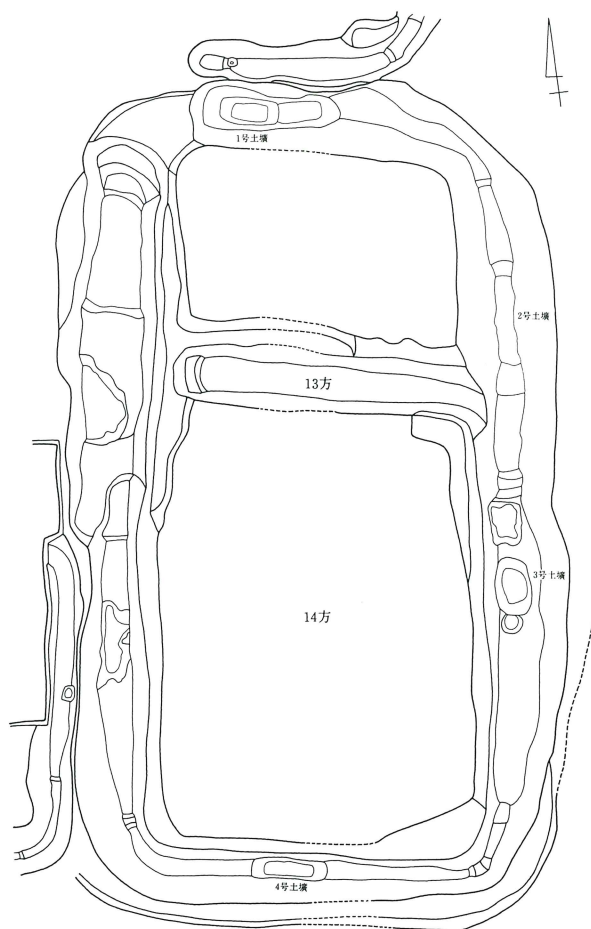
8 本郷遺跡第10a・10b号方形周溝墓



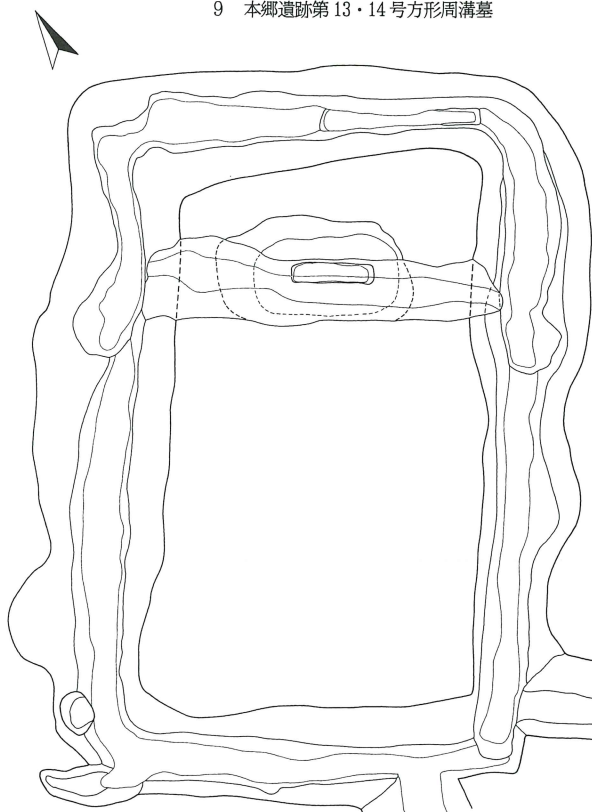
10 本郷遺跡第31a・31b号方形周溝墓



11 本郷遺跡第32a・32b号方形周溝墓



9 本郷遺跡第13・14号方形周溝墓



12 石揚遺跡第3号方形周溝墓

0 5m
1:200

数の増加や、胴部縄文帯におけるS字状結節文の減少などに新しい様相が認められる。

第38図4の赤彩された台付鉢は、器形・成形等の特徴が台付甕に共通していることから、葬祭用土器として転用された可能性も考えられる。胴部下半の接合部が明瞭に屈折した特徴を示す。

第2号周溝墓出土土器 第2号周溝墓から出土した第42図1の壺は胴部下半に接合部による屈折を残し、古いタイプの器形を留めているが、破片のため図上復元したもので、編年の位置づけについては明確でない。また、第42図2の高坏の脚部も比較的大型のものに復元されるが、細部の特徴については不明である。第1号周溝墓と直接対比できるような器種がなく前後関係は明確ではないが、周溝墓間における土器の接合関係が確認されていることから造営期間内における共時性の一端を示しており、近接した時期の所産であることは間違いない。

第3号周溝墓出土土器 第3号周溝墓からは小型埴、小型壺等の破片が少量出土しているだけである。第45図1の小型埴と推定される小破片は、器壁が非常に薄く、外面に細かいヘラミガキ調整を入念に施したもので、より土師器的な様相を示す。

第1号周溝墓を中心に土器群の様相について瞥見してきたが、最後に編年的な位置づけについて簡単に触れておく。

第1号周溝墓出土土器群の様相は、『関東の方形周溝墓』の柿沼幹夫氏の土器編年(柿沼1996)によるⅣ期に概ね該当し、壺や甕に弥生時代後期の土器の特色を残しながらも高坏や小型器台などが参入しはじめ、小型丸底土器定着以前の様相を示す段階と位置づけられている。同様に第2・3号周溝墓出土土器の時期も第1号周溝墓に近接する段階と想定される。現状における時代区分としては弥生時代後期末～古墳時代前期初頭段階に比定しておくのが妥当であろう。

(3) 群構成と造墓過程

周辺への墓域の広がりについては調査の制約もあり

明らかでないが、小規模な墓域を構成していた可能性が強く、単一の造営集団による「単位墓群」の形成として位置づけることができる。

また、群構成の特徴としては有力墓系列の第1・2号周溝墓に付属する形で、その周囲に小型の方形周溝墓が2基を一つの単位として列状に配列された造墓過程を読み取ることができる。こうした単位墓群内における規模格差の顕在化現象は、弥生時代終末から古墳時代初頭において各地で普遍的に認められており、大型方形周溝墓の造墓が群形成の契機となる場合が多いことが指摘されている(笹森1988)。周辺では戸田市鍛冶谷・新田口遺跡(西口1986)、大宮市篠山遺跡(笹森1988)、上尾市薬師耕地前遺跡(赤石1978)等でも確認されている。かかる現象は被葬者間に優劣が生じていることを示すとともに、方形周溝墓の性格自体、大きく変容していることを物語るものである。

群構成の復元 方形周溝墓の占地状況や造墓過程等を考慮して群構成について分析すると(a群)第1号周溝墓、(b群)第2～7号周溝墓、(c群)第8・9号周溝墓の小グループに分けることができる。

a群とした第1号周溝墓の造墓時期は、出土遺物に弥生土器以来の伝統を残した装飾壺が主体的に供献されていることから群内では最も古く位置づけることができる。また、繰り返し述べてきたように第1号周溝墓と第2号周溝墓は土器の接合関係から造営期間内における共時性の一端が知られており、第1号周溝墓の造墓からあまり時間を置かずb群も群形成を開始したものと想定される。

b群とした第2～7号周溝墓の構築順序は、切り合い関係などから西側の第2号周溝墓の造墓を端緒に、順次東側へ継続して営まれたものと推定される。さらに、この小グループは周溝の接続・連結関係から第3・4号周溝墓と第5・6号周溝墓の2基を一つの単位とした、重層的な構造を内包するものであったと想定される。また、b群の東端に位置する第7号周溝墓は、第5号周溝墓に近接していることから、それに後続して営まれた蓋然性が高い。

c群の第8・9号周溝墓の展開状況は、b群の第5・6号周溝墓に連動したあり方として捉えられ、同時期に造墓規制を受けた可能性が考えられる。

このように出土遺物が少なく各方形周溝墓の細かい時期が判然としないため、切り合い関係に重点をおきながら群構成及び造墓過程について検討してきた。出土土器の様相からも分かるように比較的短期間のうちに群が形成されており、占地状況及び重複関係から推測された各方形周溝墓の相対的関係を模式化すると以下のように示すことができる。

(a群) SR1…

(b群) SR2→3→4→6→5a・5b→(7)

(c群) SR8→9a・9b

以上、関東遺跡における方形周溝墓群の様相について、方形周溝墓の属性を中心に概観してきた。出土土器の分析を基に弥生時代後期末から古墳時代前期初頭段階に営まれた小規模な方形周溝墓群として位置づけ、当該期の方形周溝墓群の内包する多様性について若干の検討を行った。

今回の調査によって、鴻沼低地を臨む台地上に営まれた弥生時代後期を中心とする中里前原、中里前原北、与野東遺跡等の環濠集落の発展・解体に連携しながら、弥生時代終末から古墳時代初頭段階に水田可耕地の拡大を図るため、鴻沼川流域の谷奥へ集落や墓域が拡散していった様相が想定され、今後は遺跡群の動態を把握することが大きな課題として残されている。

引用・参考文献

- 赤石光資 1978 『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第4集 上尾市教育委員会
- 石坂俊郎他 1996 『土器が語る－関東古墳時代の黎明－』第一法規出版
- 伊藤敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集Ⅳ』(財)東京都埋蔵文化財センター pp.43-89
- 伊藤敏行 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集Ⅵ』(財)東京都埋蔵文化財センター pp.1-69
- 伊藤敏行 1994 「方形周溝墓の「拡張」」『学芸研究紀要』第10号 東京都教育委員会 pp.15-28
- 伊藤敏行 1996 「個別形態論」『関東の方形周溝墓』同成社 pp.365-376
- 今橋浩一他 1975 『針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第26集 埼玉県遺跡調査会
- 太田文雄・安井健一 1994 『石揚遺跡』千葉県文化財センター調査報告第255集(財)千葉県文化財センター
- 柿沼幹夫 1996 「「方形周溝墓」出土の土器(埼玉県)」『関東の方形周溝墓』同成社 pp.247-318
- 合田芳正他 1995 『海老名本郷』X 本郷遺跡調査団
- 佐々木藤雄 1988 『新井三丁目遺跡』新井三丁目遺跡調査会
- 笹森健一 1984 『埋蔵文化財の調査(Ⅵ)』郷土史料第30集 上福岡市教育委員会
- 笹森紀己子 1988 『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4 大宮市遺跡調査会
- 関塚英一 1987 『富士見町遺跡発掘調査報告』富士見町遺跡発掘調査団
- 常木 晃 1990 「王子ノ台遺跡」『東海大学校地内遺跡調査団報告Ⅰ』東海大学校地内遺跡調査委員会 東海大学校地内遺跡調査団
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1991 「溝中土壙小考」『研究紀要』第8号(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.9-36
- 福田 聖 1995 「方形周溝墓と溝－方形周溝墓に伴う溝について－」『研究紀要』第12号(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.1-16
- 福田 聖・山川守男・坂本和俊 1996 「埼玉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社 pp.97-119
- 山川守男 1997 『東町二丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第186集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団